なぜ英語が話せないの

〈20〉

教師、教育法に変化

報いられた〝集中訓練〟

中、高校の英語教師の八割は、厳密に言えば英語が話せない。この現状を逆転し、八割の英語教師が英語が話せるように再教育しよう！。福田昇八・熊本大学教授の発案で昭和四十五年、スタートした熊本県下の「教員集中訓練計画」（略称＋TC）は、全国教育界の注目のなか、画期的な成果をあげた。

ここに集中訓練の効果を客観的にみるため、参加した教師約三百人を対象にしたミシガン・テストの結果がある。教師たちは、訓練参加前、訓練の中期、二カ月間の訓練終了後の三回、同じ難易度の試験を受け、進歩度合を調べられた。

このミシガン・テストで、先生たちが能力検定を受けたのは「英語聴取力テスト」「英語音識別テスト」「英語能力テスト」の三つ。最初の二つは外人教師が問題を読みあげるヒヤリング・テスト。能力テストは文法、単語、読解力の筆記試験。英語教師がもつべき英語力は「各テストとも八十点が最低の基準」とされる。八十点のレベルとは、外国人が米国の大学に入学しても語学的に多少、不便はあるが、正規学生としてなんとか授業についていける程度を指す。

「聴取力テスト」を例に見てみると、研修前の平均点はわずか六十八点。成績が八十点を超えた者は一九％にすぎなかった。これが一カ月後（中間期）には平均七十八点、八十点以上四六％に上昇。二カ月後には平均点八十点、合格ライン八十点を超えた者は全体の五八％に達した。

研修終了後、教師たちは感想文集を残した。

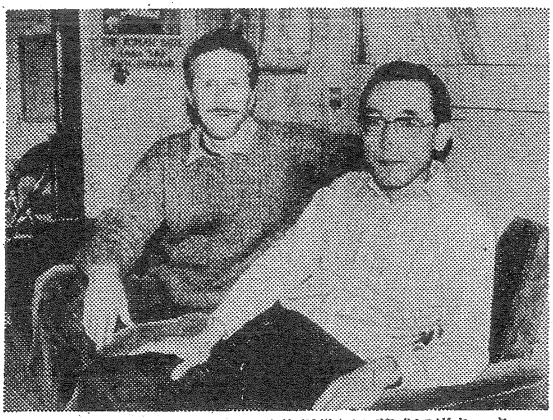
「戦中派教師で会話はまったく勉強していなかったが、受講を決意してよかった。自分が英語教師である以上、今後も努力したい」「授業で生徒を批判する前に、まず自分自身をみつめるよい機会になった」など。

生徒たちは本当に熱心だった。外人講師との会話時間を少しでも増やそうと、毎朝六時すぎに起床し、講師の送り迎え役を買って出た者、乳幼児を抱えながら、毎日往復三時間のバスで通ったママさん教師。「欠席するのは惜しい」と風邪の発熱をおして出席する先生もいた。

研修の成果が授業にどう生かされたか。先生たちの報告は「教師が変われば、生徒も変わる」であった。

研修を終了して現場に戻った中学教師の多くが「先生、英語の勉強は楽しか。私、将来は英語の先生になりたい」など、以前にはなかった体験をした。これは教師が授業のやり方を変え、自らを〝改革〟したためである。教師たちは、授業で天気や簡単な日常会話で切り出し、生徒たちは英語をに出すことに抵抗を感じなくなった。先生たちは自分たちが研修でほめられたように、生徒をほめ励ましはじめた。授業中、生徒の表情が生き生きとしているか、に気を配り始めた。

この〝熊本県下の実験〟に、各地から多くの問い合わせや激励が殺到した。長い難産の末の開講だったが、福田教授らの苦労は報いられた。



外人講師㊧と協力、話せる英語教師の養成に当たった福田昇八教授